



岩江中だより

第6号

発行日:平成26年 5月16日

発行:三春町立岩江中学校

電話:0247-62-8290

FAX:0247-62-8380

E-mail:school@iwae-j.fks.ed.jp

【野の花もまた美しきかな！ ～こころ豊かに。道ばたにも命の輝き。～】

朝、交通安全で道路にいと、人知れず美しく咲く花が目映ります。コンクリートの隙間に一つ一つの花がしっかりと根を張り、黄色やピンク、薄紫の花を咲かせています。ふと見ると、アゲハチョウがノロノロと風に吹き飛ばされそうになりながら、必死に木にしがみついていた。まだ、寒いときもありますが、このところの暖かさに誘われて、ついっっかり羽化してしまったのでしょうか。

場所がどこだろうと、人が見ていようと見てまいと、それぞれの命の継承のため、きれいな花を咲かせる野の花、ここにも確かな命の輝きがありました。



【習慣化にむけて！ ～ほぼそろっていることが多くなりました。～】

“人が見ていようがいまいが”とは、先の道ばたの花の時に使ったフレーズですが、集団生活の場として、すべての人が気持ちよく暮らせるためには、きちんとした環境づくりのため、習慣化の意義の理解とともに、習慣化するまでの練習が大切になってきます。右の写真が子どもたちの成長の経過を表しています。右の写真



は、トイレの5組のスリッパのうち、2足が横を向いており、残り3足のうち2組はその影響か、それぞれ左右を向いています。

自分が使用したものは元のとおりに戻しておく、整っていないものに関しては自分とは関係ないと傍観者にならずに、気がついた人が整えておけるような学校、1年生の紙皿作品のように、みんながにこにこ笑顔で生活できる学校をめざします。

【最後の調整に余念がありません！ ～4「打」に、はじめの挨拶に気合いを込めて～】

支部陸上大会を終え、中体連総合大会を6月初旬に控えた今、各部では、現在までの練習の成果の確認の場として、チームによってはシード権獲得のため、練習試合や大会に真剣に取り組んでいます。今回はソフトテニス部とバレーボール部の大会を応援してきました。ここに来てケガだけにはくれぐれも注意して練習や試合に臨んでください。がんばれ。岩江中学校！



【携帯依存の傾向に悩む高校生もいます！ ～依存傾向は心身不調を訴える割合高～】

(公財)日本学校保健会の小冊子「学校保健」によれば、高校生の携帯電話所有率は98%を超え、その状況下では、ネットトラブル、生活習慣やコミュニケーションへの影響、携帯電話依存傾向の問題など、心身の健康への悪影響が懸念されるという記事がありました。

さらに、その記事には、埼玉の県立高校の携帯電話に関する調査と3年前の同様の調査の比較が載っていました。その概要は以下のとおりです。

- 携帯所持率 99.1% (内9割超がスマートフォン)
- 使用頻度 「ほぼ毎日する」＝メール 54.8%→17%へ減少
＝LINE 新たに登場し76.4%
＝サイト検索 3年前の2倍
＝ゲーム 〃 3倍
＝ブログ・プロフ 半分以上
＝Twitter 20倍以上
- 1日の使用時間 3時間以上 39.2%→59.6%へ大幅増加
その分、睡眠・学習時間が犠牲になる懸念
- 携帯電話依存傾向を、「習慣的依存傾向」と「心的依存傾向」の2つのタイプで把握
＝2タイプとも、3年前に比べ高くなる。
持ち始めの時期の早期化やスマホ利用の影響が
- 携帯電話依存傾向と心身の不調・自覚症状との関連
＝2タイプとも、依存傾向の高いグループに心身の不調を訴えるものが多く存在
依存傾向の予防・改善が必要
＝依存傾向と心身の不調等の関連結果から、携帯電話は高校生に欠かせないツール
- 携帯電話の普及は、事件・事故という問題行動にだけ目を向けるのではなく、心身の健康管理面からも、依存傾向に陥ることのないよう携帯電話との上手なつきあい方を学ばせていく必要がある。

【他の地域でも同様の問題が！ ～「携帯・スマホ、ネット依存症の問題！」～】

先日、いわき地区の「第2回いわき中央警察署管内中学校警察連絡協議会」に参加する機会があり、その際の講演内容に上記の記事と同様のものがありましたので、その抜粋を掲載し、「携帯・スマホ」に起因する問題が広い地域に及ぶ問題であるということを改めて考えていきたいと思っています。

～学警連絡協議会より抜粋～

いわき中央生活安全課長様より、「特に」、ということでお話しいただいたことは、ネット上の書き込みによる誹謗中傷・名誉毀損にあたるような問題が起こっているということでした。

携帯・スマホが急激に普及する中、不適切な利用による問題が犯罪とどう結びつか検討されるところまでいっているそうです。自らブレーキをかけられないという利用者側の問題としても、携帯・スマホの適切な利用について機会をとらえ指導していきたいと感じました。

引き続き行われた、いわき明星大人文学部心理学科教授菊地雅彦先生のお話は、『“今どきの子どもたち”の理解と対応～スマホ依存の実態をとおして考える～』と題して、携帯・スマホ依存症と呼べるほど、携帯・スマホを手放せない子どもたちが増えている、その実態等についてのお話でした。それによりますと、以下のとおりでした。

～ネット依存症と考えられる子どもたちは、小・中・高校と進むにつれてその数が多くなり、自分をコントロールすることができなくなり、日常生活における負のスパイラル状態に陥っている。そんな子どもたちはネットの世界に入り込むことにより睡眠時間と勉強時間がまず犠牲にされ、さらに、ネット利用は日に日に増え続けるという傾向が見られるとともに、そういう子どもに限って、「自分は依存ではない。」と答えるのだということでした。

一方、スマホにはまる子どもたちは、その高性能、高機能ゆえ、動画を見てその影響を受け自らの言動がおかしくなる子、朝ごはんを食べなくなった子、自分からスマホの使用をとめるに止められない状況になっていく子、どれも、親が安易かつ無責任に子どもの言うがままにスマホを買い与え、子どもをますますダメにしていっているという実態があるということでした。～